第七編　観　光

観光土産　山菜五色煮と味しいたけのレッテル

第一章　面河渓及び石鎚スカイライン……三八三
一　面河渓の観光開発……三八三
二　面河渓の名勝……三九二
(一)　関　門……三九三
(二)　想　思　渓……三九五
(三)　五色河原……三九五
(四)　亀　腹……三九六
(五)　蓬　萊　渓……三九七
(六)　紅葉河原……三九七
(七)　下　熊　淵……三九八
(八)　上　熊　淵……三九八
(九)　虎が滝・虎が淵……三九八
(一〇)　霧　迫　滝……三九九
(一一)　阿弥陀淵……三九九
(一二)　御来迎滝……三九九
(一三)　鉄砲石・鉄砲石川……四〇〇
(一四)　紅　葉　淵……四〇〇
(一五)　櫃　の　底……四〇一
(一六)　紅葉石及びその付近……四〇一
(一七)　お　月　岩……四〇一
(一八)　兜岩と鎧岩……四〇一
(一九)　布　引　滝……四〇二
三　石鎚スカイライン……四〇三
第二章　面河ダム及び鼓ヶ滝など……四〇五
一　面河ダム……四〇五
二　鼓　ヶ　滝……四〇五
三　石　墨　山……四〇六
第三章　土　産　品……四〇八
第四章　村営観光施設……四一〇

第一章　面河渓及び石鎚スカイライン

一　面河渓の観光開発

面河渓が文書として知られたのは、天明のころ（一二八一―八八）松山藩士加藤勘介の詩によるものとされる。

松山市港町圓光寺明月上人（書家・寛永九年七月寂）の遺筆によれば「松山藩山林奉行職加藤勘介が面子山（当時は面子山と記す）御用に参らせ候節

白雲のたなびく峯にきて見れば
伊予の高嶺の麓なりけり

と詠まれ候の一章面白き事に感じ入候」というのがありこれが最古のものとなっている。

『加藤勘介、面子山之御用に被参候節、山中之詠吟数首有之候、中にも白雲農鬚鬚峰丹来亭見礼波伊予濃高根乃麓那里計里と詠せられ一章、面白事と感入候』（原文）

しかし、せっかくの加藤勘介の名吟も効なく、面河は山深く秘められたままで長く知る人もなかった。

その後、明治三十年ごろ、海南新聞に「面河川溯江の記」が出ており、同四十年ごろには、面河村（柚川村）に長く教職についていた故石丸富太郎が小波（さざなみ）と号して紙上に大いに宣伝もし、また、各種有名人を招いて四季の探勝に努めたため、ようやく世人の注目するところとなるに至った。

石丸富太郎

明治十九年（一八八六）一月四日、温泉郡重信町に生まる。十四歳で上浮穴郡面河村大成小学校教師として勤め、後、愛媛師範学校に入学、明治三十八年（一九〇五）三月優秀な成績で卒業。柚川村渋草尋常小学校の訓導兼校長となる。

富太郎は、子供たちの教育に精魂を打ち込むかたわら、すぐれた面河の景色を広く世間に知らせようと考え、ペンネームを「小波（さざなみ）」とし、当時の海南新聞に投稿して、面河渓の紹介を試みた。そのころ、同紙の編集長であった田中蛙堂（たなかあどう）をたびたび訪ね、面河渓のすばらしさを説明して熱心な調査を促した。

蛙堂は、彼の熱心さに動かされ、当時の松山地方の優れた詩人・画家・登山家・写真家などを誘い、九人で面河を訪れた。時に明治四十二年（一九〇九）十月二十日のことである。

当時はバスとてなく、黒森峠を越え、笠方を通り、渋草、若山を経ての徒歩コースであった。

地元では、面河始まって以来の観光団とあって大がかりな歓迎会を計画、一行の渋草到着は夜中であったが、のろしを上げ、音楽会を催すなどして、当時の村長、小椋和太郎はじめ村民総出で歓迎したという。

季節は、十月末のこととて、紅葉の時は既に過ぎていたが、次々現れる谷川のすばらしいながめに、一行は目を見張り、ため息をつくばかりだったという。

当時は、道など全くなく、がけをよじ、岩から岩へ跳び渡っての観光であったが、新しい景観が眼前に開けるたびに空船橋（くうせんきょう）や蓬莱渓（ほうらいだに）と名をつけ、今にその名が残っている。

この時の紀行文は、俳句や詩、スケッチや写真などとともに、十数回にわたって海南新聞をにぎわせた。これによって初めて面河渓のすばらしさが世に知らされたのである。それからぼつぼつと観光客が面河渓を訪れるように

なった。

富太郎は、その後、教職を去り、海南新聞の記者になったが、終生、面河渓の宣伝に努力を惜しまなかった。

昭和二十四年（一九四九）九月二十四日没、享年六十四歳

顕彰碑は昭和四十九年（一九七四）五月、浅海蘇山揮毫により石丸富太郎翁頌徳碑として面河関門に建てられたが惜しくも流水のため現在は流出して不明

（「上浮穴郡に光をかがげた人々」より）

海南新聞『面河探勝団』

「海南新聞」の明治四十二年十一月二十一日号に「面河探勝団」の記事として次のことが記載された。

面河探勝団

石鎚高峰の南麓に位せる面河（オモゴ）の大森林は由来怪勝奇景に富むの地なるも交通不便なるを所以を以って未だ世に知られざるを遺憾とし我が同人は茲に同趣味の士を誘ふて此秘勝を探らんとす団員氏名左の如し

○宮脇　鯉渓君　○森田雷死久君　○牧野　菱江君　○河東澹太郎君　○富田陸三郎君　○原田　栄君

○佐賀テツヤ君　○松本　剣巌君　○田中　蛙堂君　其　他

而して一行は二十日正午を以って勇気凛々東に向って発足せり探勝予定概ね左の如し

二十日　上浮穴郡仙川村渋草宿泊

二一日　大成風穴視察若山宿泊

二二日　面河探勝渋草帰泊

二三日　渋草発河ノ内観瀑の後帰松

明治四十二年十一月二十五日には、「面河探勝団帰松」の記事として次のことが載せられた。

面河探勝団帰松

宮脇鯉渓、森田雷死久、牧野菱江、原田栄、河東澹太郎、富田陸三郎、佐賀テツヤ、松本剣巌、田中蛙堂の九名《外二三子加はる筈なりしも事故中止》を以て組織したる面河探勝団は予定の如く廿日午後一時三分立花発の汽車にて横河原に到り途中河ノ内方面の勝地を探り午後六時廿分河ノ内出発黒森峠を経て夜半十二時杣川村大字杣野字渋草着廿一日は大成風穴視察の上同村大字大味川字若山着、廿二日面河の勝を極て渋草に引返し、廿三日午前十時渋草出発午後五時卅分横河原着、同七時立花駅に帰り草鞋穿きの儘豊坂町亀ノ井に入り持帰りたる兎、山芋を料らせて慰労宴会を開き十時過ぎ全く散会したり其探勝記事は更めて記載すべし因に杣川村各部落に於ける有志諸君の厚意を謝す。《一記者》

なお、一行の探勝の様子や地元の歓迎ぶりなどについては、松本剣巌の「面河探勝の記」として五回にわたり「海南新聞」に連載され、また、佐賀徹也の版画四回・森田雷死久の「面河探勝句録」四回、宮脇鯉渓の漢詩二回も掲載された。記事一覧は次のとおり。

明治42年

11月26日「面河探勝の記」㈠剣巌生
11月27日「面河探勝の記」㈡剣巌生
　テツヤ絵「渋草の里」
11月28日「面河探勝の記」㈢剣巌生
　テツヤ絵「大成の里」
11月30日「面河探勝句録」㈠森田雷死久
　テツヤ絵「ひと本獄」
12月1日「面河探勝の記」㈣剣巌生
　「面河探勝句録」㈡森田雷死久
　テツヤ絵「関門」
12月2日「面河探勝句録」㈢森田雷死久
12月3日「面河探勝の記」㈤剣巌生
12月4日「面河探勝句録」㈣森田雷死久
12月15日・12月23日　宮脇鯉渓漢詩

以下、森田雷死久「面河探勝句録」より

面河探勝句録　㈠　雷死久

川の内より黒森峠をさして上る。鯉渓翁空腹と老体に堪へて屢々落悟せんとす。剣巌是れを助けつゝ上る。

薬草にや匂へり夜道草踏めば
山の九合目に至れば中天を焦がすの焚火、空山に響く萬歳の声、余等を迎ふる一行と知れり。
虎杖(いたどり)の枯木も投ず榾(ほだ)火哉
媼の一人住まへる峠の茶店に憩ふこと暫時、茶をすゝる者菓

子を喰ふ者、渇猟の飲、飢蛭の徒に似たり。

慎みもなき饅の徒と疑へり
　種子栗に鼠通へる榾火哉

楽隊に迎へられて笠方に着す。休憩所に入りて茶菓の饗応を受く

川千鳥鳴くもあらんにろうがまし
　立鉢に二椀重ねぬ今年蕎麦

夜半渋草に着す。鞘橋の傍り、月を宿せる枯木立の下、渓流を裏に緑山を前にせる一草舎は、余等一行の宿舎にしてあかあかと灯ともせり。

御馳走ふる祭の行灯灯氷る
　畑の餘地鶏垣もして柿干せり
　鯇(あゆ)の味主が避暑の話かな
　茶の花も見しか茶所茶に誇る
　面河探勝句録 (二)　雷死久

渋草より大成に行く途上杖を噛む寸餘の霜柱、黎を掛けたる二、三の茅茨、趣味の津々たるものあり。

雪折の竹も尚ある霜威哉
　兎飛ぶ黍刈捨ての椿畑
　木立道来て掛け豆の兎追ふ

大成の有志迎旗を翻へし一行を迎ふ。宿に昼飯の饗応を受く、台に上るものは、兎の丸煮、蕪の風呂吹など、易牙の調も啻ならざるものあり。

風呂吹に萢菜(そうさい)の一血も添へに鳧(けり)
　迎旗立つる桂古木の落葉かな
　茶の花に聟見せん宿の美人あり

同所に淡路守の墓と称して小さき石標あり。里人之れを荒縄もて縛し諸願を祈ると

縁結ぶ木も植へて若葉落葉せん
　面河探勝句録 (三)　雷死久

同地の名物豊年踊を見る。黛ひ厚き小娘のさげ髪に慰斗(ママ)を燃ひて結ゆるが如き襦袢の振袖、扇打ち振りて踊る様のかげに、優美なる薪負ふ乙女の業とは思はれず。

色合せ草花の数を並べけり
　踊子にまじる新酒に酔ふてあり
　歓迎会席上
　大器より袖釜にそそぐ新酒哉
　壮語せば天狗が真似す榾火哉
　霜月の鯇脂なき榾火哉

一行結束して面河の谷に入る。途上三々倍の家あり。

一軒家よべの踊の朝寝にや
　竹の屋根枯木の霜の雫散る
　杖を伐りて峻嶮を上る。数十丁にして風穴に至る。此処蚕種を貯ふるに冷度、関西一と称せらる。
　水無月の雪に猿の来て眠る
　杖に選ぶ木は黒文字の落葉して

若山の青年団は法螺を吹き鳴らして一行を迎へり。
枯木まばら枯尾花山法螺響く
若山の宿舎に着し草鞋の紐も解かざるに、先づ落ち付きの饗応として人形回し（串芋）唐黍の麺に、四山の暮色を迎ぎて渋茶をすゝるなど趣味感興且つ口腹為に充てり。
榾の煙眼にしむ宿や人形廻し
渺やけふも時雨るゝ山宿に
面河探勝句録（四）　雷死久
△面河十五勝
錦木の瀑
滝の影空に映れる銀河哉
仙洞巌
仙人の意気に飛びける黄蜂※哉
※「上浮郡案内」では「蝶」
関門
右顧の滝左顧の鴨淵紅葉散る
空船橋
梯子よじて又渡る橋胆寒し
竜眠滑
帰り咲く花に盃を流しけり
孤松巌
去るを惜みて帰んなん詩に日短かき
王母泉
薬降るや仙を盟ひし跡ならん
方壺霊
雲消ゆる虚空に鳴ける時鳥
間湖弓
淵の渦落木に鴛鴦のかくれけり
流桃淵
宿り木の巨幹も枯れて冬の山
烏帽子峰
天門を覗けば雲耶餘花白し
如来の瀑
狂ひ咲く躑躅の紅に小春哉
蟾除雲
木の実拾へば山霊蟇のとがめあり
彩葉岩
猿鳴きて寒山の空木の葉飛ぶ
八公巌
幽邃之境一行目八仙（即興）
蛙堂水を渡り剣巌岩に踞す

〔註〕森田雷死久＝明治五年（一八七二）伊予郡恵久美（現松前町）に生まる。幼名愛次郎、本名貫了。少年時代郡中谷上山宝珠院に入る。後、伊予郡南山崎村真城寺住職となる。一時還俗の後、温泉郡潮見村（現松山市）平田宝珠院住職となる。大正五年六月没、享年四十三歳。その間子規門に属し、松風会再興に力を尽くす。地方俳壇の隆盛に功のあった人。後、碧悟桐の新傾向俳句に共鳴して作句した。

「海南新聞」の「面河探勝団」より、神野昭著「久万高原の文学と伝承」による。

面河観光開発者としての中川梅吉

中川梅吉は、明治十三年（一八八〇）四月一日、面河村大味川若山に生まれた。

貧しい百姓の子として生まれた梅吉は、本を買うことも思うにまかせず、人から借りた本をむさぼるように読んだという。こうした努力は、梅吉の生涯の力となった。

明治三十五年（一九〇二）若山に一軒の旅館を建てた。梅吉が二十二歳の時である。

梅吉が旅館を建てた当時は、ときたま訪れる行商人や富山の薬売りくらいであった。観光客が訪れるようになったのは、大正十年（一九二一）ころからである。

児童文学者の巌谷小波（いわやさざなみ）も、面河渓を訪れ宿泊した。梅吉が建てた旅館は、「紅緑館（こうりょくかん）」とつけられた。名は巌谷小波がつけ、直筆による大看板が掲げられた。のち歌人、吉井勇が看板の裏へ「面河なる五色河原の朝霧に我れたちぬれてものをこそ思え」の一首をしたためた。（これを原本にして、現在、関門ホテルの玄関先にこの歌碑がある。）

梅吉は、亀腹旅館（現在、伊予鉄渓泉亭）も経営した。

梅吉は、裸一貫から雑貨商を始めとして旅館経営へと将来を展望する眼をもち、面河観光開発の草分けとして面河発展に寄与した功績は大きい。学務委員、村会議員などの要職も務めたが、昭和八年（一九三三）八月十八日、五十三歳の若さで世を去った。

紅緑館は、昭和二十五年（一九五〇）関門に移されたが、昭和三十五年（一九六〇）火災によって、全焼し、家宝の看板も、名士が残した多くの書画とも灰となった。二代目、安市、三代目、鬼子太郎（現二十六代村長）によって

再建され現代は関門ホテルとしてユースホステルの機能も果たしている。

（「上浮穴郡に光をかかげた人々」による）

その後、大正時代には菅広綱村長（第十三代村長）、昭和になっては重見丈太郎村長（第十四、十七、二十一、二十三代村長）、中川鬼子太郎現村長（第二十六代、新しい面河村になっては第五代村長）などが、それぞれ石丸富太郎（小波）のあとを受けて観光開発、宣伝に努めてきた。

終戦後は、大面河観光協会（会長　新谷善三郎）が生まれて観光事業はいよいよ本格化し、そのためバスは面河渓の入口、関門まで通じ、小型は更に亀腹まで行けるようになった。バス路線は、国鉄、伊予鉄の順に開通し、昭和四十五年石鎚スカイラインの開通により観光客の数は飛躍的に上昇した。

四季を通じての景勝のよさを医者であり、俳人である故酒井黙禅は次のようにたたえている。

幽谷や知らですぎたる瀧いくつ

（昭和六年に大阪毎日新聞社が募集した「日本新名勝俳句」高浜虚子選に最高位で入賞したもの。昭和四十二年五月二十一日黙然句建設委員会が亀腹鶴ケ背橋の東畔に建てる。高さ一・六メートル、幅〇・五メートル、自然石）

瀧の道錦木橋を仰ぎ入る　　日月と古りゆく渓の幾曲がり
冷かに澗水たゝえ十九尺　　戻り来る鯇釣一人秋の雨
紅瀧の昇るが如くサルスベリ　　鯇釣も岩茸採ももっと奥
山の家コバノトネリコ花盛り　　みみづくや渓深々と雪敷ける
涼しさや身のまわり只渓の音

なお、俳紙「若葉」主宰者の故富安風生は

霧さむし深山燕の鋭き衍（こだま）

とうたい、この句碑は、面河国民宿舎前の広場東北隅に高さ一・五メートル、幅〇・六メートル、台石〇・八メートルの自然石で「富安風生先生喜寿祝賀並に糸瓜三十周年記念事業として糸瓜発行社之を建てる　昭和卅六年八月　森薫花壇」と刻され建てられている（側面に石工誠鳳とあり、糸瓜社とは、若葉が全国組織の俳句結社であるのに対し、故森薫花壇を中心とする地方組織の結社である。）。

以上面河渓の歴史を概観すると次のようである。

一　天正十五年（一五八七）面河渓を占める実に三、二〇四ヘクタールの国有林野は、この戦国時代、大洲藩戸田勝隆公の支配地。

一　慶長八年（一六〇三）賤ケ岳七本槍で有名な加藤左馬介嘉明公の支配地（合津城主に封ぜらる。）

一　寛永四年（一六二七）蒲生忠知公支配地参勤交代途上京都にて客死、継嗣なく廃絶。

一　寛永十二年（一六三五）松平隠岐守定行公支配地伊勢国桑名城より松山城主として封ぜらる。

一　天明三年（一七八三）面河踏査、松山藩山林奉行加藤勘介の面河山林踏査（当時は、面子と書く。）山中詠吟を残す。面河に関する文献で最古のもの。

一　明治四年廃藩置県まで二百三十七年間久松家によって治められ明治維新となる。（したがって面河渓は、これらの諸候の領有管掌の許に過した。）

一　明治新政府実現により国有林（現景勝地）に編入された。

一　明治三十六年（一九〇三）温泉郡重信町拝志上村出身、石丸富太郎、面河村小学校教師として赴任し、面河渓開発着目、広く世に宣伝し紹介に尽した。

一　大正十五年五月（一九二六）作家、厳谷小波登山す。

一　昭和二年六月（一九二七）画家、[注] 語堂登山す。

一　昭和二年七月（一九二七）作家、秋山英一、「石鎚連峰と面河渓」を著す。

一　昭和五年六月（一九三〇）歌人、吉井勇登山す。
一　昭和五年十月（一九三〇）作家、江見水蔭登山す。
一　昭和八年二月（一九三三）文部省告示第五九号第一類天然記念物保存法第一条により国指定名勝地に指定さる。
一　昭和八年五月（一九三三）文部大臣、尾崎行雄登山し、面河渓入口猿飛滝を綿木の滝と命さる。
一　昭和二十八年十月（一九五三）農林大臣、赤城宗徳登山す。
一　昭和三十年十一月（一九五五）国定公園に指定さる。
一　昭和三十二年（一九五七）面河川・坂瀬川・割石川・水利利用面河ダム設置着工さる。
一　昭和三十六年八月（一九六一）面河渓に富安風生句碑建立さる。
一　昭和三十九年（一九六四）面河ダム完成す。
一　昭和四十年一月（一九六五）石鎚スカイライン着工さる。
一　昭和四十二年三月（一九六七）面河渓に酒井黙禅句碑建立さる。
一　昭和四十二年四月（一九六七）明治百年事業全国六か所に国民のいこいの場として国民の森設定さる。面河もその一つ。
一　昭和四十二年四月（一九六七）明治百年記念として、皿ヶ嶺連峯県指定自然公園として鼓ヶ滝が指定さる。現在流失。
一　昭和四十三年十月（一九六八）面河渓に国民の森詞碑建立さる。
一　昭和四十九年五月（一九七四）面河に石丸富太郎翁頌徳碑が書家、浅海蘇山の揮毫により建立さる。
一　昭和五十三年十一月十九日（一九七八）面河、関門ホテル前に吉井勇の歌碑建立さる。

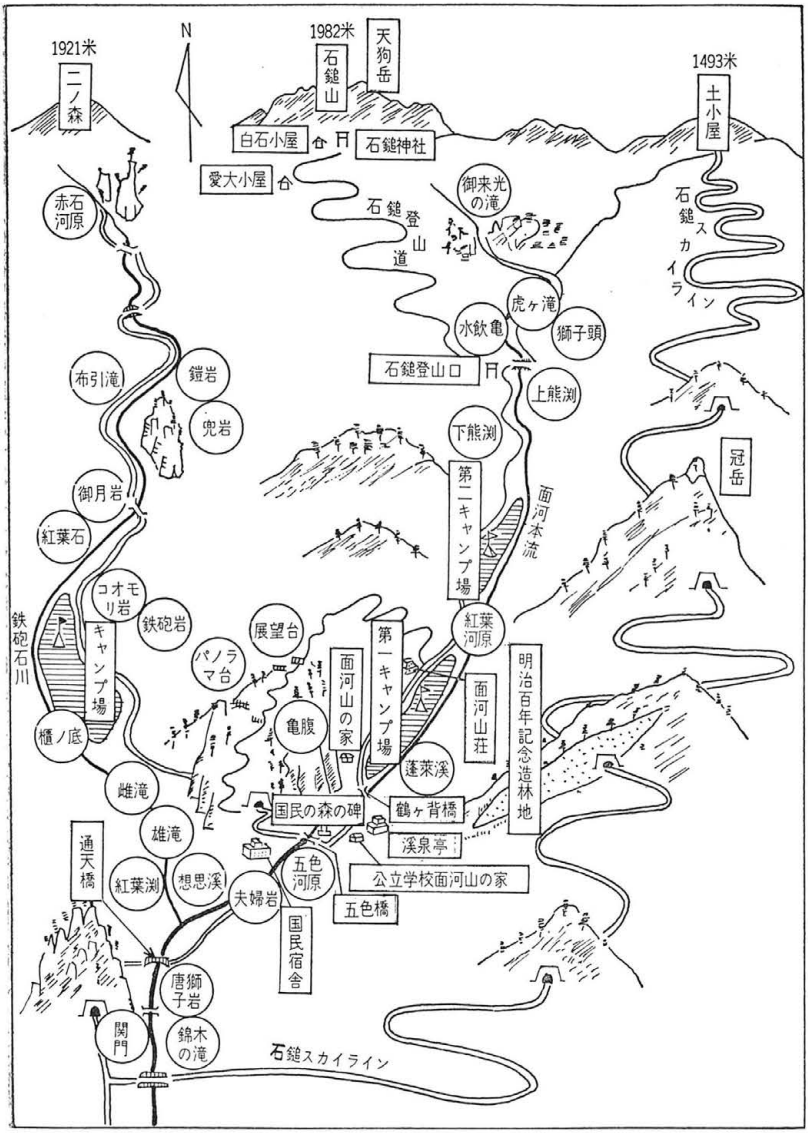
二　面河渓の名勝

面河渓は、昭和八年二月二十八日、文部省より名勝地の指定を受け、その指定理由として「面河渓は、面河山本流

の上流をなせる石鎚山南麓の渓谷にして其大部分は堅緻にして粗き節理なせる石英閃緑岩より成り渓間至る所に断岸壁立し危岩聳峙し岩石美に富めるのみならず満山原始に近き大森林を以て蔽はれ渓流は水清く流急にして所々に瀑布をなし深潭碧淵其の間に交錯して景観の変化に富み稀に見るの峡谷美を構成す。就中関門・屏風岩・兜岩・鎧岩の絶壁と御来光瀑・霧迫瀑・熊淵・紅葉淵等の瀑布・淵潭は局部的景勝の尤なるものなり。」と記されてある。さらに、昭和三十年十一月一日には石鎚として石鎚山を中心に面河渓谷及びその連山を含む一〇・六八三ヘクタールの地域が国定公園に指定され観光的価値はいっそう高められた。

(一) 関　門

梅抜約七六〇メートルにある関門は、深く切り立った狭谷でほとんど水平に並ぶ岩石の節理と、これを縦横に切る裂罅と両岸に道路面から約七〇メートルの絶壁を造り、各岩壁は正方形の岩塊を積み重ねたようで一奇観を呈し、節理の間は植物の着生に便利でヒノキ・コウヤマキ・ヒカゲツツジ・イロハモミジ・イワタバコなどが一面に生育している。今にも落ちそうな七〇メートルの絶壁は、岩石が皆黒黝色で、生ひ茂る老木は、日光の透過をさえぎり、昼なお暗く夏も肌寒いようでその崖下を流れる面河川の水は、透明度が高くて底の小石さへ透いて見えるほどの清流である。見つけの滝から関門橋まで一二七メートル。両岸の幅、最短六メートルから最長二五メートルに及んでいる。最深点の深さは、入口から第二裂罅の手前にあって六メートルである。最高点は、左岸にあって路面から約七三メートルある（遊歩道を基準）。面河渓の玄関、関門に立つ者は、その岩石の奇と水の清さと植物の蓊蒼としているのに驚嘆する。ヒノキ・コウヤマキ・ヒメシャラなどの木本天を覆い、仰いでわずかに一筋の青天を見るほどである。


N
1921米
二ノ森
1982米
石鎚山
天狗岳
1493米
土小屋
白石小屋
石鎚神社
愛大小屋
赤石河原
石鎚登山道
御来光の滝
石鎚スカイライン
虎ヶ滝
水飲亀
獅子頭
石鎚登山口
上熊渕
下熊渕
布引滝
鎧岩
兜岩
御月岩
紅葉石
冠岳
第二キャンプ場
面河本流
コオモリ岩
鉄砲岩
鉄砲石川
キャンプ場
櫃ノ底
展望台
パノラマ台
亀腹
面河山の家
第一キャンプ場
紅葉河原
面河山荘
明治百年記念造林地
蓬萊渓
鶴ヶ背橋
国民の森の碑
雌滝
雄滝
通天橋
紅葉渕
想思渓
夫婦岩
五色河原
溪泉亭
公立学校面河山の家
五色橋
国民宿舎
唐獅子岩
関門
錦木の滝
石鎚スカイライン

面河国民の森案内図

(二) 想思渓

面河本流と支流鉄砲石川の合流点で鉢巻岩から約五〇メートルの上流にある。この両川の合流する所、今までの黒味勝の岩石が白色のものに移り変わろうとする所で、岩石の点から見てもなかなか興味のあるところである。

この辺り、ヒノキ・イロハモミジ・イタヤカエデ・ヒメシャラなどの大木やクガイソウ・シラヒゲソウ・アサマリンドウなどの草木がよく生育して美しい。

昔は、石鎚登山の本道に当たり、人々はここを通過したものである。この旧道を登って鉄砲石川越えに出る間は、コウヤマキ・ゴヨウマツが無数にあって、また、眺望も非常によい。

(三) 五色河原

関門から約八二〇メートルの所にある。

関門から想思渓までは、流れが比較的急であるが、この辺りは河床は緩傾斜をし、その上を河水が緩やかに流れ、背景には面河第一の絶勝、亀腹があり、岩石の白色・流水の清藍色・苔類の黒色・藻類の緑色などは、両岸の樹木の色とよく調和して端麗優美の景観をつくり、関門の景を雪舟の墨絵とすれば、この所は光淋の彩色画にも相当するであろう。

面河渓中の奇岩亀原を背景として流れ緩やかに河幅広き五色河原はまことに仙郷である。

なお道路の東側に岩から出てくる風穴がある。

㈣ 亀　腹

五色河原に連続して関門から約一キロの所にあり、この辺りの高度約六八二メートルである。

最高約一一〇メートルの大断崖は、幅約二〇〇メートルの間連続してそのほぼ中央に垂直に走る凹面で左右の二部に区分され、各部は中央部凸出してあたかもビール樽のようですこぶる奇観である。この大断崖は、平滑でほとんど植物の着生を許さず、わずかにケイビラン・チャボツメレンゲ・イハヒバ・セキコク・ミヤマガンビの類が生育している。

亀腹に向かって左の水面から五、六メートルの所に炭酸水が湧出し、必ず一日に数回、時には二、三羽、また時には五、六羽の鳩がよく来るので鳩の水と呼んでいるところがある。

註　炭酸水の成因

一　湧出する炭酸水から弐千万年前の石鎚火山の活動を知る手がかりをつかみ、亀腹炭酸水の分析を行なった。

一　亀腹岩壁の足もとから出ており、面河渓を訪れる登山者や観光客から、鳩の水として、ラムネ代用に親しまれている。

（鳩が見つけたので昔からハトの水と言われている）

一　石鎚山の生い立ちと深い関係がある。普通火山活動を止めた時、その名残りとして地下に多量の炭酸ガスを溶かし、炭酸水ができる。

一　この炭酸水も、昔石鎚山が壮大な火山であったことを示している。

昭和三十三年七月二十日石鎚山系総合学術調査（学説より）

主催　愛媛県・愛媛新聞社
後援　愛媛大学・県教育委員会
　　松山営林署・西条営林署
協賛　陸上自衛隊松山駐屯部隊
　　伊豫鉄道株式会社面河山の家

（中川愛美氏の活動による）

㈤　蓬莱渓

鶴背橋を渡って三〇メートルのところに蓬莱渓がある。

この辺り一帯は河幅広く、カエデ・ウラジロガシ・ヒノキ・ツガなどがよく生い茂り、枝葉低く河面に下る。岩石は、白色で大理石のようである。節理はあたかも階段状でその上を透徹清冷な河水が流れ下る様は、四季を通じて面河第一の景といえよう。

昼なお暗い密林を通り抜け、造林事務所の裏に出ると蓬莱渓である。対岸の植物もうっそうとして、殊に水の清さと岩のおもしろさと相まって確かに面河渓中屈指の名所たるを失わない。

㈥　紅葉河原

蓬莱渓を上ること二〇メートル。白色の岩石の上に同岩の礫、岩塊が一面に覆いかぶさり、今までとは趣が著しく異なった所である。両岸の樹林はよく生育し、タカオモミジ・イタヤカエデ・コハウチワカエデなどのカエデ類が非常に多く、それ故紅葉の美観は面河第一である。その上、ケヤキ・モミなども多く、下草にはクサアジサイ・ハガク

レツリブネなどの可憐のものがある。河幅約三〇メートル、長さ約八〇メートルの間である。

(七) 下熊淵

亀腹から約八八〇メートルの所にある。

この辺り川幅がいよいよ狭くなり、両岸の山も相接して、その上、樹木はうっそうと生い茂っている。そこに灰黒色で硬度の高い岩石が幅およそ二〇メートルの間に現れて河水の浸蝕に対抗し一瀑布をつくっている。そのため河はS字形に曲がり、滝壺も著しく発達して深さ一〇メートル、面河第一の深淵をつくっている。右岸の岸頭はちょうど猛獣が口を開いているようで、一奇観である。熊淵という名はこれから起こったものであろう。

(八) 上熊淵

下熊淵から約三〇メートル上流にある。

樹木は一面に生い茂り、硬度のやや低い白色の岩石の中に灰黒色の硬度の高い岩の出たもので、下熊淵に比して滝も淵も小形で、深さもまた五メートルである。

この付近は両岸相迫って清流は面河渓第一の深淵を作っている。

(九) 虎が滝・虎が淵

関門から約一・五キロの石鎚山登山道の分岐点から右に道をとって橋を渡ると虎が滝・虎が淵に出る。

この辺り一帯はまた白色の岩が多いが、虎が滝の岩類は、灰黒色硬度の高い岩石からできていて、一瀑布は深さ六

メートルの滝壺をつくる。その右岸頭は関門式の節理と破れ目からなる断崖で樹木草木がよく着生している。
渓流は虎が淵に来て、獅子岩・浮亀岩の奇岩塊を洗う。両岩塊ともにその名のような形が一奇観である。

㈩ 霧迫滝

亀腹から約二・八キロの所にあり対岸の岸壁から高さ約一三メートルの滝が落下する。河床には五個の白色の大岩塊の礫があって河の景観が一変する。この辺り一帯は、急傾斜の両岸に針葉樹がよく繁茂し、林相の美しいことは面河中屈指の所である。

㈠ 阿弥陀淵

亀腹から約三・八キロの所にあり、この辺りの高度は約七九〇メートルである。
灰白色の岩石が北四〇度から五〇度の方向に延びて、節理と割目のために一階の高さ一・二メートル、幅一メートルの一〇階段になって、これに渓流がかかって美しい景をつくる。周囲には樹木がよく生い茂っている。
土地のしだいに高くなるにつれセイタカスベムシ・レイジンソウ・ヤマソテツ・ツクバネソウなどの種類が現れ、クロズル・ナナカマド・アカヤシオなども見受けられ、モミ・ツガなどの針葉樹と相混じて密林をなしている。しかし、道とてほとんどなく、渓流を右に左に渡り、木の根に沿って登るなど実に難路である。

㈡ 御来迎滝

亀腹から六キロ、高度一二〇〇メートルのところにあり、一〇〇〇メートルぐらいから急峻となる。

滝は柱状節理の所にかかって二段となり、高さ約四一メートル半で飛沫に洗われた所を合わすと幅三四メートルある。位置高く視界をさえぎる何物もなく、黒色の柱状節理と相まって面河第一の瀑布をなしている。岩石の崩壊著しいのか滝の下部は石柱の破片山積して滝壺をなさない。

滝のある所既に一一〇〇メートルの高所であるため、植物景観もみずから針葉樹林の相があってモミ・シラベ・ヒメコマツ・コメツガなどがあり、樹下や岩壁には四国特色の珍種もいろいろある。

㈢　鉄砲石・鉄砲石川

国民宿舎の後を通ってキャンプ場に向かうといわゆる鉄砲石川がある。鉄砲石の小分水嶺パノラマ台を越えて密林の中を行くと近くに種ヶ島の短筒のような鉄砲石がある。鉄砲石川の名はこれから起きたと伝えられている。

この川に沿っている谷は比較的よく開け、しかも奇岩と清流を併せ持っている。相思渓から上って紅葉淵に至ると直ちに紅葉岩・兜岩・鎧岩へ出る。さらに上ると布引滝を経て阿弥陀滝に出るとマダケの竹林がある。ここは昔多数の人家があったと伝えられ、これより谷は五代森、二の森などに開けてますます奇観を現す。

布引滝付近にはヨコグラノキの老木があり高さ二〇メートル、周囲五メートルに達している。また、お月岩に出る所の林中にはのりの大木があり、周囲七メートルもある。櫃底より近くケヤキ谷がありケヤキが特に多い。

㈣　紅　葉　淵

本流・鉄砲石川の合流点から約六五〇メートルの所にあり、白色の岩石にかかる小瀑布とその滝壺で、滝壺の形からするとむしろ扇淵といいたい。白色の岩石、絶壁の老樹澄み切った水色とともに一景観を作る。

㈤ 櫃の底

紅葉淵に連なり、左岸一帯は六個の大岩壁に区分されて屹立し、その下を鉄砲石川が流れる。岩壁面にはイワタケが生え、その頂上には針葉樹が生い茂っている。

㈥ 紅葉石及びその付近

キャンプ場の上、お月岩の間にあり、この辺り一帯は白色の岩石でこれにカエデの葉のように集まった黒色電気石の結晶が明りょうに現れている。それぞれ一葉の長さが一〇センチ内外で数一〇〇個ずつ二か所にあり、水をかけるといっそう黒色がさえてくる。

㈦ お月岩

紅葉石のあるところから上流へ、橋を渡って五五メートルで達する。灰白色の一大絶壁で、中部がやや凸出し、最高点が約四五メートル、幅六三メートルである。断崖面は垂直に並ぶ大石板でその麓の道を行く者は、今にも岩片が落下するかとあやぶまれる。

㈧ 兜岩と鎧岩

お月岩から約一〇〇メートル川上の左岸にある。お月岩と同一形式の景観である。

両者を通じて幅八四メートル、最高約七三メートルあり、川下のものが兜岩で全形が兜の鉢のようで多数の節理面

と鋭角をもって交じわる縦の二種の割目とは兜に似た模様をつくり出す。

鎧岩の方は緩傾斜の節理面を垂直の割目が規則正しく切って鎧をほうふつとさせる景観を呈している。

㈥ 布引滝

鎧岩から約三〇メートル上流右対岸にある。

鎧岩などと同一形式の岩壁の縦の裂罅にできた滝で、ほぼ水平に走る節理と割目に鈍角を作って流れ、中途で少し方向を転じて流れ落ちる。高さ約四〇メートルである。この付近の渓谷はやや打ち開けた中にヨグラノキの大木・ヒノキ・イヌザクラなどの美しい樹相を呈する。（以上面河渓・石鎚山・探勝の栞による。八木繁一著、大面河観光協会発行）

このような面河の景勝を郷土の芸能人、遠藤太次馬（明治二十年十二月二十四日、大味川、相ノ木に生まる）は次のような数え歌に詠んでいる。

面河景勝数え歌

作詞
作曲　遠藤太次馬

一ツトセ　広い日本で名も高い
所は愛媛の面河渓
名所古蹟は数知れず

二ツトセ　降り積む面河の雪景色
滝にも氷の柱たて
見渡す限り銀世界

三ツトセ　見かへり滝をば後に見て
関門景色を眺めつつ
空船橋を渡られる

四ツトセ　よろいの岩やかぶと岩
お月岩とて名も高い
もみじ石もこれ名勝

五ツトセ　石鎚山をばいただいて
参拝する人数知れず
くさりにすがりてのぼられる

六ツトセ　昔も今もかわりなく
清き流れの五色川

流れに泳ぐあめの魚
七ツトセ　なんと立派な亀腹に
咲いたるつつじの美しさ
炭酸水とて名も高い
八ツトセ　はちまき岩や想思渓
おしどり橋を渡らせて
パノラマ台にのぼりゆく
九ツトセ　此所は名高いひつの底
鉄砲石とて名も高い
軍艦岩もこれ名勝
十ツトセ　虎が滝やら御来光滝の
落ち込む水のすばらしさ
こまどり鳴くのも勇ましや

このような風光明眉（めいび）な観光地に年々観光客が増えその数は次のようになっている。

昭和36年	150,000人
〃 37〃	200,000
〃 38〃	200,000
〃 39〃	250,000
〃 40〃	280,000
〃 41〃	280,000
〃 42〃	300,000
〃 43〃	330,000
〃 44〃	350,000
〃 45〃	420,000

なお昭和四十三年四月、明治百年記念行事の一つとして面河渓谷を中心とする地域に面河国民の森が設けられた。これは、高知営林局、松山営林署が管理する国有林で面河国民宿舎に行く橋の手前に「国民の森の碑」がある。

三　石鎚スカイライン

昭和九年九月十日に発行された「伊豫郷土文学選」（和田義一編、伊豫郷土研究会発行）の中で田村剛は面河渓という文中の末尾に、「面河は古くより石鎚登山者の裏道であって、将来道路交通機関等開発の上は、この処女の渓谷『面子』は遂にその名を天下に喧伝せらるゝ日が来るであろう。」と述べている。

石鎚スカイライン道路図

その後、戦後昭和四十年一月県土本部から構想・計画が発表され、やっと四十五年九月一日に開通式にこぎつけたのであった。

詳しくは、第八編特殊開発の第二章石鎚スカイラインの項を見よ。

第二章　面河ダム及び鼓ケ滝など

昭和四十二年一月二十五日に皿ケ嶺連峰は県立自然公園に指定された。

皿ケ嶺連峰県立自然公園は、主峰皿ケ峰（一〇七一メートル）を中心とする東西約一六キロに及ぶ連峰と山麓の地域でその面積はおよそ三〇九五ヘクタールである。

この公園の自然美は、ブナの原生林をはじめとする森林景観、山麓一帯の渓谷や滝、変化に富む奇岩あり、面河ダムや割石川の上流、鼓ケ滝等が含まれる。

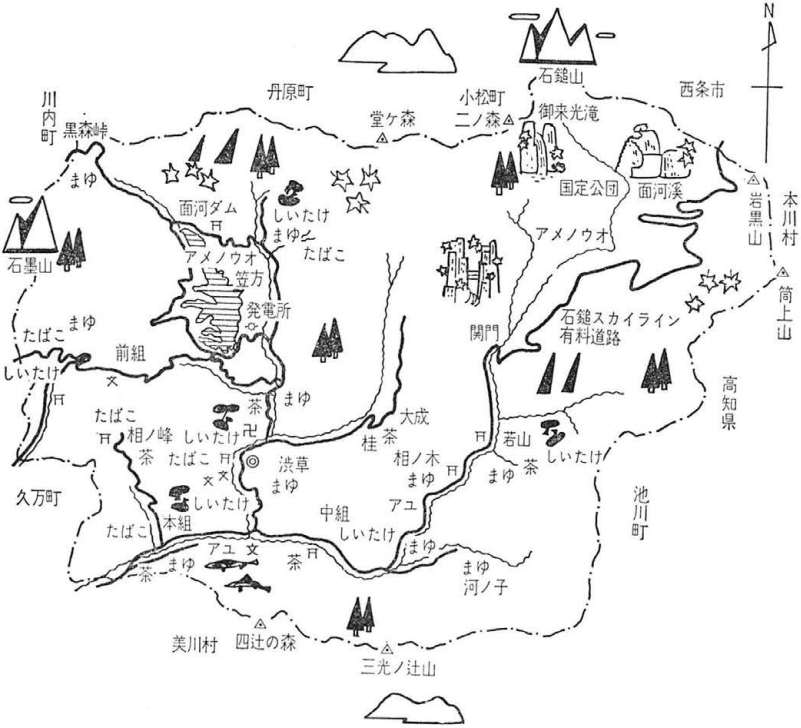
一　面河ダム

満水面積一二四・八ヘクタールの面河ダムは昭和三十八年十一月六日、笠方地区八四世帯を水没して作られたが、満々とたたえられた風光もまた美しく、春に秋に訪ずれる人もまた少なくない。詳しくは、特殊開発の第一章面河ダムに詳述する。

二　鼓ケ滝

割石川の上流、妙と梅ケ市の妙寄りの地区から支流を東に入ると鼓ケ滝に出る。この滝は平家伝説とも関係が深

面河村略図



く、奇岩奇景が広がり、ヒナチドリやイワヒバなど多彩な植物も多く、平家岩屋・鬼船底・たいこ岩・心の川滝・魚止・赤なめらなどと名づけられた景勝がある。

古来、笠方地区には昔の伝統ある木地師が住み、これらが習合して平家の落人伝説が作られたものと思われる。

三　石　墨　山

石墨山も皿ケ嶺連峰の一つとして杣野にあり一四五九メートルもある。晴れた日は道後平野や瀬戸の島々を見渡すことができる。ここにはおもしろい赤鬼法性院の伝説がある。（伝説の項に詳述）

その他観光資源としての山々が堂々とそびえている。

参考――高越山（阿波）一、一二三メートル、富士山三、七七六メートル

西方					
横綱	剣山（阿波）	一、九五五米	前頭	伊予富士（伊予）	一、七五六米
大関	ジローギュー（同）	一、九二五〃	同	石立山（伊予・土佐境）	一、七〇八〃
関脇	三嶺（同）	一、八九三〃	同	東赤石山（伊予）	一、七〇七〃
小結	筒上山（伊予・土佐境）	一、八五九〃	同	平家平（伊予・土佐境）	一、六九三〃
前頭	天狗塚（阿波）	一、八一三〃	同	黒森山（伊予）	一、六七八〃
同	白髪山（土佐）	一、七七〇〃	同	天神丸（伊予）	一、六五六〃
			同	天神丸（阿波）	一、六三二〃
			同	西赤石山（伊予）	一、六二六〃
			同	寒峰（阿波）	一、六〇五〃
			同	笠取山（伊予）	一、五六二〃

蒙御免　四国山岳番付（米――メートル）

東方					
横綱	石鎚山（伊予）	一、九八二米	前頭	寒風山（伊予・土佐境）	一、七六五米
大関	二ノ森（同）	一、九三〇〃	同	冠山（同）	一、七三二〃
関脇	瓶ケ森（同）	一、八九七〃	同	五代森（伊予）	一、七〇七〃
小結	笹ケ峯（同）	一、八六〇〃	同	黒笠山（阿波）	一、七〇三〃
前頭	矢筈山（阿波）	一、八四八〃	同	堂ケ森（伊予）	一、六九〇〃
同	手箱山（土佐）	一、八〇七〃	同	烏帽子山（阿波）	一、六七〇〃
			同	綱附森（土佐）	一、六四三〃
			同	高城山（阿波）	一、六二八〃
			同	権田山（同）	一、六〇九〃
			同	大坐礼山（土佐）	一、五八八〃

参考――雲辺寺山（阿波）九一一メートル、竜王山（阿讃県境）一、〇五七メートル（山田竹系著「四国風土記」より）

第三章　土　産　品

張前頭　土佐　土佐本川ワサビ

西方		東方	
前頭　讃岐　ゴマどうふ	前頭　阿波　昼間の黄金ジンゾク	前頭　讃岐　上西の山家そば	前頭　伊予　南予のホータレ
同　土佐　フグのミリン干し	同　伊予　面河ワラビの塩漬	同　讃岐　烏貝の味噌煮	同　阿波　藍畑の粟雑炊
同　阿波　バカ貝酢もの	同　土佐　イタドリの塩漬	同　阿波　美馬の花粉そば	同　讃岐　こんぴらタケノコ
同　伊予　岩松川の青のり	同　土佐　大月の古満目ブリ	同　阿波　木頭の青藍ノリ	同　土佐　南国の七宝菜
同　阿波　撫養ハマグリ	同　阿波　橘の車エビ	同　阿波　阿部のアラメ	同　讃岐　男木島のヒシホ
同　阿波　伊島の太刀魚	同　讃岐　ヒラの酢もの	同　伊予　長浜黒田のウニ	同　阿波　剪宇の山ウド
同　土佐　物部川のゴリ	同　阿波　穴吹のハスイモ	同　伊予　肱川のゴリ干し	同　土佐　大月のナガレコ
同　伊予　イソギンチャクのぬた	同　讃岐　安原の炭谷ゴボウ	同　土佐　サバずし	同　讃岐　イイダコ辛子和え
同　讃岐　直島の干しダコ	同　土佐　日高の赤目イモ	同　阿波　福井のタケノコ	同　土佐　ヌカみそ汁

蒙御免　四国うまいもの大番付　行司　山田竹系

張前頭　土佐　酒盗　讃岐　男井間池のコイ

面河の特産品としては、林業関係の杉・桧やしいたけ・茶などがある。詳しくは第六編産業の項参照。

いわゆる観光土産品としては全国一律に記念メダルなどの地名や風景を入れたものが多いが、地元の特産土産としては、しいたけ・茶、いわたけや山菜料理の五色煮・紅マス・おもご饅頭・はったい粉・古木細工などがある。

（山田竹系著「四国風土記」より）

張前頭　讃岐　小豆島もろみ

西方		東方	
前頭 讃岐 しょうゆ豆	前頭 伊予 面河の岩茸	前頭 讃岐 観音寺のエビテツ	前頭 伊予 面河の紅マス
同 伊予 八幡浜・宇和島かまぼこ	同 讃岐 磯ずし	同 阿波 橘・小松島の竹輪	同 伊予 関川ズイキ雑炊
同 阿波 アユ雑炊	同 讃岐 打ち込み汁	同 讃岐 高松の細てん	同 讃岐 東讃アイゴの大根煮
同 讃岐 鉄砲和え(テッパイ)	同 伊予 ヅガニのやき食い	同 讃岐 山伏のツクリ	同 阿波 日和佐ウツボ割干し
同 土佐 カツオ生節	同 阿波 たらいうどん	同 讃岐 津田のキンコ	同 阿波 鳴門イガイの潮やき
同 土佐 たまむし	同 土佐 うるめ	同 土佐 カツオめし	同 土佐 津野山コンコ
同 伊予 おさつま	同 伊予 大洲のいもだき	同 土佐 タビエビ	同 阿波 阿部のアワビ
同 讃岐 白鳥イギス	同 伊予 三崎のサザエ	同 伊予 カツオのブツ切り	同 讃岐 マンバのケンチン汁
同 土佐 ニロギの味噌汁	同 阿波 宍喰アイゴ一夜干し	同 阿波 祖谷の岩茸	同 讃岐 小豆島ナマコのサザエ焼き

蒙御免　四国うまいもの大番付　行司　山田竹系

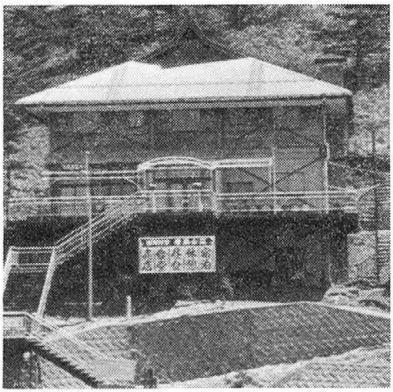
張前頭　阿波　粟山ワサビのゴブ漬

（山田竹系著「四国風土記」より）

第四章　村営観光施設

村営の観光施設としては次のものがあり、春から秋にかけて多数の観光客を収容している。

簡易宿泊



岩黒山荘

●住　　所　愛媛県上浮穴郡面河村土小屋
〒791－17

●宿泊施設　鉄筋2階建個室5室広間
2室

●宿泊定員　60名

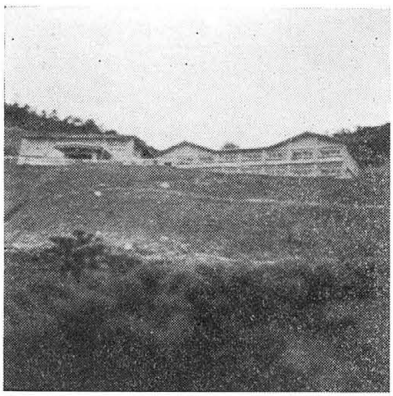
●T E L　0898—32—4951
（4月15日～11月15日迄）
他期間　089258—2832

●位　　置　手箱・筒上・丸滝・岩黒山登山口。石鎚山も眺められます。

●交　　通　国鉄・伊予鉄バス利用
大駐車場有り。

昭和48年3月31日愛媛県より買収

国民宿舎



石　　鎚

●住　　所　愛媛県上浮穴郡面河村土小屋
〒791—17

●宿泊施設　鉄筋2階建個室21室大広間
2室

●宿泊定員　110名
（昼食定員300名）

●T E L　0898—32—4950
（4月15日～11月15日迄）
他期間　089258—2832

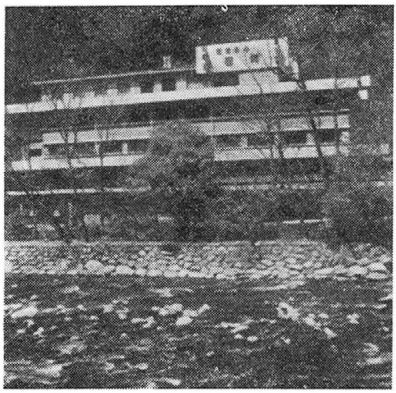
●位　　置　石鎚登山口に位置し、美しい瀬戸内海が一望出来ます。

●交　　通　国鉄・伊予鉄バス利用
大駐車場有り。

昭和48年3月31日愛媛県より買収

国民宿舎

面　　河



●住　　所　愛媛県上浮穴郡面河村関門
●T　E　L　(089258)2211代
●施　　設　本館　鉄筋4階建
和室25 広間2　110名収容
別館　木造2階建
和室7　30名収容
●位　　置　石鎚国定公園面河渓谷の中央にあり、五色河原にかかる五色橋を渡った所にあります。
●交　　通　予讃本線松山駅　国鉄バス面河行2時間30分　1日2便
松山市駅　伊予鉄バス面河行
2時間30分　1日5便
大駐車場有り。
昭和41年6月1日完成

国民宿舎面河別館「面河山荘」は昭和48年3月31日愛媛県より買収

観光センター

●住　　所　愛媛県上浮穴郡面河村関門
●T　E　L　(089258)2907
●施　　設　鉄筋2階建　1F売店
2F食堂
収容人員　80名
●位　　置　石鎚国定公園面河渓谷入口、石鎚スカイライン有料道路入口にあります。
●交　　通　予讃本線松山駅　国鉄バス面河行2時間30分　1日2便
松山市駅　伊予鉄バス面河行
2時間30分　1日5便
大駐車場有り。
昭和46年6月1日完成

参考

国民宿舎利用料金表（S.48.3）

1　宿泊利用料金　　1人1泊につき

単位　円

施設名	料金区分／利用区分	宿泊料	食事料 朝食	食事料 夕食	食事料 計	合計
面河	大人	850	200	450	650	1,500
	中学生	650	200	450	650	1,300
	小学生	440	200	450	650	1,100
	幼児	無料	実費	実費	実費	実費
石鎚	大人	850	250	500	750	1,600
	中学生	650	250	500	750	1,400
	小学生	450	250	500	750	1,200
	幼児	無料	実費	実費	実費	実費
岩黒	大人	650	250	500	750	1,400
	中学生	450	250	500	750	1,200
	小学生	250	250	500	750	1,000
	幼児	無料	実費	実費	実費	実費
山荘（和宝）	大人	750	200	450	650	1,400
	中学生	550	200	450	650	1,200
	小学生	350	200	450	650	1,000
	幼児	無料	実費	実費	実費	実費
山荘（ヒュッテ）	大人	650	200	450	650	1,300
	中学生	450	200	450	650	1,100
	小学生	250	200	450	650	900
	幼児	無料	実費	実費	実費	実費